

「日月」書
川口よね子
(元専任教員、元別科教務主任)

戴帽式



戴帽式 同窓会館にて(昭和 45 年)



戴帽式 記念会館にて(平成 25 年)



校旗



校章バッジ



キャップタック



キャップとエンブレム

校章は川口よね子先生の母校の校章を参考に
1 回生の時創られた。

青線で学年を示していた頃のキャップ

平成 5 年から受け入れることになった男子学生にはエンブレムが贈られる。



フローレンス・ナイチンゲール像(46 回生寄贈) 東医扇山ハイツに寄贈された像

校 歌

土井 晚 翠 作 詞
平 野 主 水 作 曲

♩ = 100 壯嚴に

ヒ ポ ク ラ テ ス の う な り に よ き れ わ る み
ミ チ の う ん の な り の よ き れ わ る み
ギ リ シ ャ の に む か し り こ の み ち と の も
こ ほ う め い す に し の に あ じ さ ん ぼ か ら い け の
と う あ り は さ ら に は る か な る を
し ん わ の か げ に に お う あ と げ ん り っ う ふ た つ か れ と こ れ
そ う か い の う ち い っ て き の こ う けん わ た れ の せ め と し て
よ よ ひ ろ め し い さ を し の あ な お が ざ ら め や と お と し さ め ん
い さ お な る と き い わ が こ う の あ な お に ご う ゐ ゃ と ま お し め ん

東京医科大学

校 歌

土 井 晚 翠 作 詞
平 野 主 水 作 曲

- 一、ヒポクラテスの名によれる ギリシャの昔、斯道の
光明、西のあさばらけ 東亜は更にはるかなる
神話の蔭にほう跡 源流一二つ、彼と此
世々に広めしいさをしの 仰がざらめや尊さを
- 二、その千歳の遠きより 洋々の末はてしなく
知の一切を料として 萬物の霊人類の
病を救ふ仁の術 修め学びて帝城の
北の一隅幾百の 青春の子等睦み合ふ
- 三、威を官字の名に借らず だゞこれ力―誠より
湧き来る励、身を駆りて 倣ふは三たび眩折りし
いにしえの跡、世にいでて 薬屋の中も玉楼の
上も等しき人の子の 生の恵を補はむ
- 四、道の蘊奥理の極み 深きに限あらずとも
歩々の進に人界の 福利次第に増すものを
滄海のうち一滴の 貢献われの責として
功成るときわが校の 名に光明を増さしめむ

校舎と寮

昭和 54 年大学構内の基礎新館に移転するまでは、西新宿の病院敷地内に校舎があった。



東京医科大学附属高等看護学校と本科寮(昭和 43 年)



プレハブ校舎(昭和 45 年完成年)



寮にあった夾竹桃:薬理学堀部先生撮影
夾竹桃の葉の成分は強心配糖体とのこと



別科寮と別科の校舎



別科入口



別科が廃校となる前年の昭和 50 年に 80 名定員に増員された 12 回生 B クラスは、本科寮に入らず別科寮に入った。「別科寮」は後に「光和寮」に、「本科寮」は「清和寮」に改名された。



進学科校舎(昭和 56 年)

基礎新館

昭和 53 年、大学敷地内に基礎新館が完成。昭和 53 年 4 月から昭和 54 年 7 月にかけて病院にあった看護専門学校は基礎新館に移転した。それまで体育の授業以外は病院内の校舎で行われていたが、13 回生の卒業試験は基礎新館で行われており、13～15 回生は病院内の校舎と大学の基礎新館の両方を使用していたことになる。全ての授業を基礎新館で受けるようになったのは、16 回生からである。

移転当初の基礎新館は、2～4 階が看護専門学校の校舎で、1 階は駐車場と喫茶室であった。しかし、学校長が岩根久夫先生の時に 1 学年の学生数が 116 名となったことがあって、教卓の直前まで学生が座っている状況になった。そこで、1 年教室と隣の部屋の壁を撤去し教室を広げ、同時に 2 階の図書室と事務室・講師控室を 1 階に移動。1 階の駐車場はなくなり、喫茶室は記念会館地下に移った。図書室のスペースは広くなり、そこに学習室 4 室が増設された。学生のための学習室増設は岩根先生のアイデアによる。

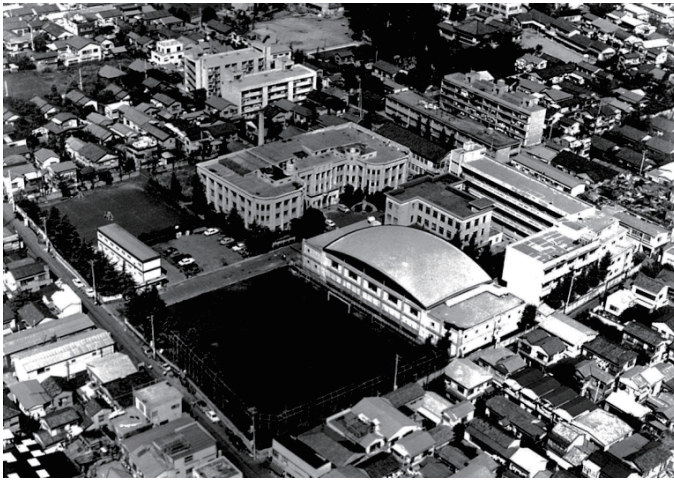


1 階左が駐車場、右が喫茶室だった頃の基礎新館



1 階が図書室・事務室になった基礎新館

東京医科大学



基礎新館ができる前の大学全景



基礎新館が完成した後の大学全景



第一校舎と記念会館(昭和 41 年)



第一・中央校舎 記念会館前にはヒポクラテス像(平成 25 年)



正門(昭和 49 年)



正門(平成 25 年)

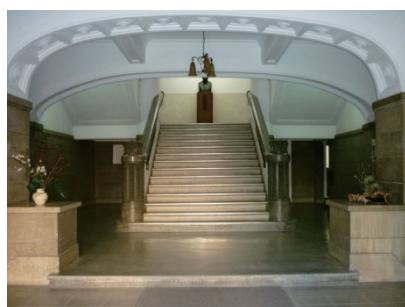
2013(平成 25)年の大学構内



高橋琢也先生像

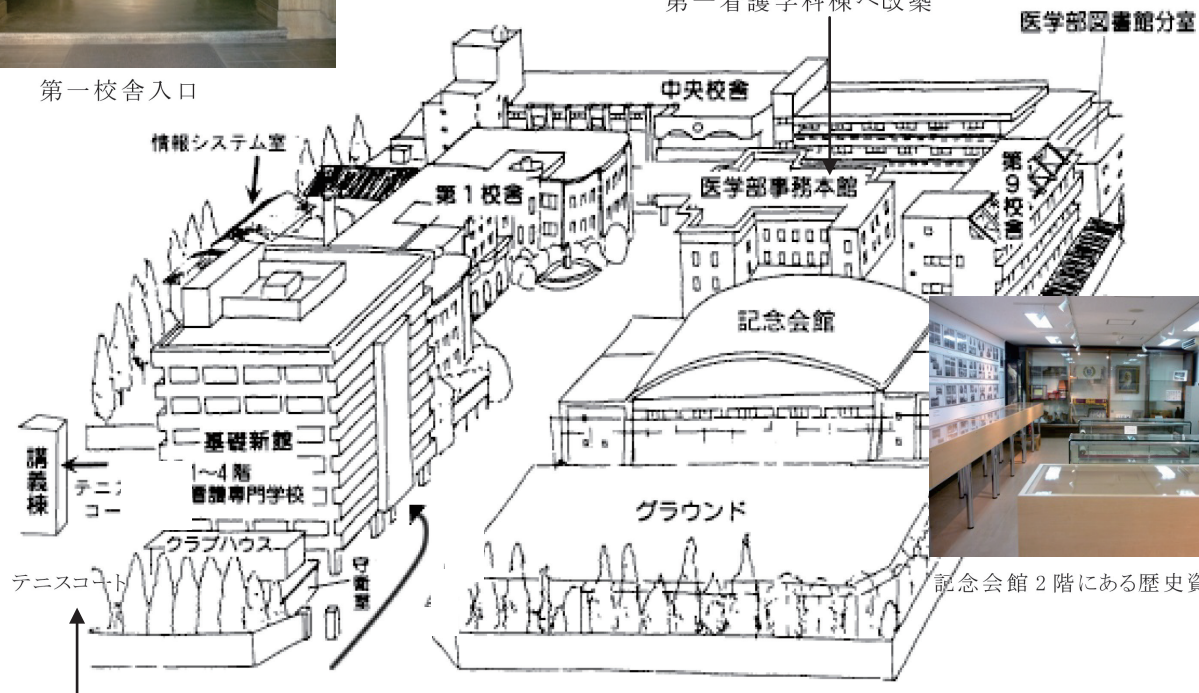


春、裏庭に咲いたしだれ梅



第一校舎入口

2013 年大学事務本部は
第一看護学科棟へ改築



記念会館 2 階にある歴史資料館

平成 25 年テニスコート跡地には、第一看護学科棟建築中



第一校舎前のベンチ



グラウンドは平成 24 年人工芝に

歴代学校長



初代
与謝野 光
(昭和 39.4～46.3)



第二代
高橋 雅俊
(昭和 46.4～55.3)



第三代
長村 重之
(昭和 55.4～61.3)



第四代
本多 輝男
(昭和 61.4～平成 3.3)



第五代
岩根 久夫
(平成 3.4～8.10)



第六代
伊吹山 千春
(平成 8.11～11.3)



第七代
高崎 優
(平成 11.4～14.3)



第八代
友田 燁夫
(平成 14.4～20.3)



第九代
勝村 俊仁
(平成 20.4～22.3)



第十代
山科 章
(平成 22.4～現在)

歴代副学校長・教務主任



高等看護学校
初代
加藤 三千子
(昭和 39.4～43.3)



高等看護学校
第二代
上杉(中村) 栄子
(昭和 43.4～45.3)



高等看護学校本科
第三代
亀川 すよ
(昭和 45.4～52.1)



看護専門学校本科・看護科
第四代
岡田 宮子
(昭和 52.4～55.3)



看護専門学校看護科
第五代
福岡 笑子
(昭和 55.4～平成 3.3)



看護専門学校看護科
第六代
黒坂(石塚) 知子
(平成 3.4～18.3)



看護専門学校看護科
初代副学校長
峰村(吉田) 淳子
(平成 18.4～現在)



看護専門学校看護科
第七代
石塚 睦子
(平成 18.4～現在)

亀川すよ先生の時代に別科が、亀川・岡田・福岡先生の時代には進学科が併設され、准看護婦の看護婦国家試験受験資格取得とキャリアアップのための教育が行われた。



高等看護学校別科
初代
川口(山田) よね子
(昭和 45.4～46.9)



高等看護学校別科
第二代
橋本(竹田) 由子
(昭和 46.10～49.8)



高等看護学校進学科
杉浦 亮子
(昭和 49.9～61.9)

歴代事務長

佐藤 甲子郎
(昭和 39.4～42.4)



安原 康夫
(昭和 57.4～平成 5.4)

佐藤 龍一
(昭和 42.5～50.3)



渡辺 力
(平成 5.4～7.7)

笹本 四郎
(昭和 50.4～57.3)



堀江 政敏
(平成 7.9～10.8)



小島 言和
(平成 10.9～11.12)



吉江 將哲
(平成 12.1～14.8)



生澤 誠
(平成 14.8～16.6)



小島 言和
(平成 16.7～18.7)



後藤 健
(平成 18.8～)

東京医科大学看護専門学校創立 50 周年を迎えて



学校法人東京医科大学理事長・学長
臼井 正彦

2013 年 4 月に東京医科大学看護専門学校の創立 50 周年を迎え、本学看護専門学校教職員ならびに関係者の皆様、同窓および在校生の皆様と共に記念的な節目の慶事を挙行できますことを大変うれしく思います。皆様、改めまして創立 50 周年、誠におめでとう御座います。

東京医科大学の看護系医療の歴史は、1957 年に東京医科大学病院附属准看護婦学校の開校から始まりました。1964 年 4 月に東京医科大学附属高等看護学校が開校し、与謝野光先生が初代校長となりました。1965 年に東京医科大学に入学した私は、いつも大変柔和で紳士であられた与謝野先生を尊敬していました。1970 年には高等看護学校に修業年限 2 年間の進学課程別科が出来、1974 年には修業年限 3 年制の夜間進学課程Ⅱ部が併設されました。本科の定員も 1975 年には 50 名が 80 名となり、卒業生も次第に増えてきました。1978 年には東京医科大学看護専門学校に改称すると共に本科は看護科、Ⅱ部は進学科となりました。その頃、私は眼科教室の講師で進学科の眼科授業を担当し、屈折や外眼部と眼底疾患について講義したことを昨日のように覚えています。夜間の講義であつたので大分疲れている学生も多かったように思いますが、試験は良く出来ました。1983 年 4 月には看護科の 20 周年と進学科の 10 周年を迎えました。このころの校長は血液・呼吸器内科で大変有名であられた長村重之教授で、医学部の定年後に三代目の校長に就任されました。また、1986 年からは小児科学の本多輝男教授が四代目の校長になられましたので、看護専門学校に対しても大変親しみを感じていました。このころになると卒業生も 1400 人以上となり、卒業生に医療専門課程専門士の認可が得られるようになりました。2002 年からは私の友人である生化学の友田輝夫主任教授が第八代目の校長になり、看護専門学校の様子を時折聞かせてくれました。2003 年 9 月に私は大学病院の病院長に就任しましたので、役目柄、入学式、戴帽式、卒業式などにお招きを頂くようになり、また学長になった 2008 年 10 月からも看護専門学校との関わりがより一層強く、そして多くなりました。荘厳で身が引き締まる戴帽式や卒業式の学校を去ることの寂しさと共に明日への大きな希望を持つ華やかな謝恩会など本当に楽しく過ごさせていただきました。

2016 年には看護専門学校が廃校になりますが、50 年の経緯があり輝かしい伝統を築いてきた看護専門学校の生き様を医学部看護学科が引き続けてくれることを切に願ってお祝いの詞といたします。



進学科で眼科の授業の講師をされていた頃の臼井先生
(昭和 53 年)

創立 50 周年にあたって



東京医科大学看護専門学校 学校長
山科 章

東京医科大学看護専門学校は、東京オリンピックが開催された昭和 39 年（1964 年）に開校し、半世紀という長い歴史を経て、創立 50 周年を迎えることができました。これもひとえに開設時から尽力され、ご支援、ご指導いただきました東京医科大学の諸先輩方ならびに関係各位のおかげと感謝しております。私は本校の 10 代目の校長にあたりますが、こういった節目の年に校長を担当させていただき、大変に光栄に思うとともに貴重な経験ができることを喜んでおります。

東京医科大学看護専門学校は、その理念である「倫理観に基づく豊かな人間形成をめざし、看護に必要な基本的知識、技術、態度の育成をはかり、自主自学の精神で継続学習し、看護の質向上と変化する社会に貢献できる看護師を育成すること。」にそって、今日まで、3,641 名の卒業生を輩出してきました。多くの出身者が社会で活躍しており、こうした社会貢献という大きな成果を残しながら、50 周年を迎えることは学校としての誇りであります。歴代の校長、教職員、大学病院で指導にあたってくださいました皆さん、東京医科大学の関係者の皆さんに対して、校長として深く感謝いたします。

一方、東京医科大学では、かねてより準備を進めてまいりました医学部看護学科が新設され、この春 89 名の看護学科一回生が入学しました。看護専門学校はそれにあわせて、本年 4 月の入学を最後として、新入生が全員卒業した時点で閉校となります。創立 50 周年を迎える伝統ある看護専門学校としてその幕を閉じることとはとても残念ですが、看護専門学校の発展形が看護学科であり、卒業生も途切れることなく継続され、輝かしい伝統も引き継がれます。

東京医科大学の看護教育が、看護専門学校 50 周年を期に、さらに発展してゆくことを願って創立 50 周年記念日を迎えたいと思います。



戴帽式で式辞を述べる山科先生
（平成 25 年）

創立 50 周年を迎えて



看護専門学校初代副学校長
峰村淳子(第 7 回生)

本校の創立 50 周年を迎え卒業生の一人として感慨無量です。今まで本校の発展にご尽力頂いた歴代学校長・教務主任・教職員・非常勤の先生方、臨床の関係者、同窓の諸先輩、そして法人に心より感謝を申し上げます。現在までの卒業生は 3600 余名に及び、その同窓の国内外での活躍を知る度に、本校で学習したことを素地にそれぞれの成長へと繋げられていることに喜びと尊敬と誇りを感じております。

私自身は昭和 48 年に本校を卒業、東京医大病院の臨床から看護専門学校の教員として異動し、現在副学校長という要職を拝命致しておりますが、私のような浅学菲才の身で記念すべき時期にこの立場でいることに、再び身の引き締まる思いで一杯になっております。この場を借りて、私をここまで導いて頂いた恩師や上司、そして同窓の支援に心よりお礼を申し上げます。

本校の教職員には、諸先輩方が築かれてきた学究心や研究的土壌が脈々と引き継がれ、現在も意欲的に教育活動に取り組み、歴史ある学校として質の高い教育が実践されております。看護専門学校として「紀要」を 23 年間も継続発刊していることも全国的にも類を見ないものです。

学生の気風は、内外の先生方から自由でのびのびとしていると言われております。本学の理念である“自主自学”の考えを基盤に、専門職としての資質を身につけた人を送り出すことを大切に教育しておりますが、近年はその実践の難しさに悩んでいることも否めません。

残念ながら本校は平成 28 年 3 月に閉校となってしまいます。最後まで、看護専門職になる“人”を育てることを見失わず、前学校長岩根久夫先生の言葉にもあった「希望と信念と誇りを持って」を胸に質の高い教育を行い、有終の美で締めくりたいと思っております。

私自身も設立準備から関わった念願の『医学部看護学科』が本年開校し、東京医科大学看護専門学校の良き伝統は引き継がれていくものと確信しております。そして、名実ともに東京医科大学の看護の発展、さらには世界の看護界に貢献される方々が、益々多く輩出されることを夢見ております。

最後に関係者の皆様には、閉校まで看護専門学校へのご支援を賜ります様よろしくお願い申し上げます。



送辞を述べる峰村先生
(昭和 47 年)